

# 「かえっこ」を用いた子ども参加型ワークショップの試み

—西宮市御前浜周辺整備のための調査研究 その3—

正会員 ○岩根裕子\*  
同 花田佳明\*\*  
同 川北健雄\*\*

住民参加 まちづくり コミュニティ  
ウォーターフロント 遊び 地域づくり

## 1 はじめに

かつて、海水浴場としてにぎわった西宮市御前浜は、阪神間に残る貴重な自然海浜のひとつである。現在この浜では、新たな公共性に支えられた公共空間づくりをめざして、地域住民・利用者・行政の協働を通じた御前浜周辺整備計画のための様々な活動が進められている。神戸芸術工科大学では、2004年度から兵庫県阪神南県民局からの依頼を受け、大学での環境デザイン分野における研究教育の一環として、これらの活動に参加している。



初年度である2004年度には浜の利用実態の調査を行い、2005年度には地域の人々と共に、この場所の新たな利用方法の提案として、浜辺空間における映像上映会などを行った。そして、2006年度から2007年度にかけては、国の史跡である西宮砲台内部の利用実験及び、浜辺空間を活用した様々な遊び方の実験を地域の子どもたちと共にを行い、小学校と連携した活動へと展開した。

本稿では、これらのうち、浜辺空間における様々な遊びを子どもたちに体験させる仕組みとして用いた「かえっこ」に焦点をあて、地域づくりにおけるこのシステムの有効性等について考察する。

## 2 「かえっこ」とは

### (1) 仕組み

「かえっこ」とはアーティストである藤浩志が考案した、いらなくなったおもちゃを持ち寄り、「カエルポイント」という通貨を介して物々交換を行うシステムのことである。「かえっこ」の会場では、地域の特色や目的に合わせた様々なワークショップを同時開催し、それらに参加したり、お手伝いをしたりすると「カエルポイント」がもらえる。そのポイントをおもちゃと交換できるので、子どもたちはポイントを貯めようと意欲的にワークショップ



や運営のお手伝いに参加するという仕掛けになっている。

### (2) 全国での実施状況

「かえっこ」システムの運用方法は公開されており、誰もが使うことができる。現在では、様々な地域イベントの一環として全国各地で行われており、藤浩志自身が行うこともあれば、地域住民が主体となって行う場合もある。

## 3 御前浜における適用実験

### (1) 実施日時

2006年度から2007年度にかけて御前浜においては、下記の通り「かえっこ」を用いた催しを三回行っている。

[第1回] 2006年7月16日(日) 14:00~16:30

[第2回] 2006年8月5日(日) 14:00~17:00

[第3回] 2007年9月23日(日) 13:00~17:00

第1回と第2回は藤浩志を招いて直接指導を受け、第3回は、大学と地域住民及び行政関係者のみによる運営で行った。

### (2) 第1回及び第2回の実施内容

第1回は「かえっこ」をうまく運営するための練習として行い、ほぼ同じ内容で第2回を本番として行った。

[実施ワークショップ]

- 炭集め (運営スタッフ: 学生1名)  
ゴミ問題の一つであるバーベキューの炭を拾うゲーム。
- 遊びの天才! (運営スタッフ: 学生2名)  
浜での遊びを考えてもらうワークショップ。
- シール作り&キッズパトロール  
(運営スタッフ: 学生1名/地域住民2名)  
持ち帰り用ゴミ袋を作成し(シール作り)、そのゴミ袋を配り、ゴミの持ち帰りを呼びかける。
- 砂掘り探検 (運営スタッフ: 学生1名/地域住民5名)  
何十年も前の台風で砂に埋まった門柱をみんなで掘って見てみようという企画。地域住民からの提案で、運営も地域の方がおこなう。
- 水質調査探検 (運営スタッフ: 学生2名/地域住民3名)  
水質調査キットを使った海水の水質を調べる実験。
- こどもレポーター (運営スタッフ: 学生1名)  
子どもたちが大人にインタビューする。

- g. スイカ割り (運営スタッフ: 学生1名)
- h. 御前浜「ゴミのなぞ」探偵事務所 (運営スタッフ: 学生1名)  
ゴミ拾いしながら不思議なゴミを探し、そのゴミについて考える。

#### [実施結果]

第1回は約30人、第2回は約70人の子どもたちが参加した。参加者の中には、西宮市だけでなく、神戸・大阪などからの方や、他地域での「かえっこ」に参加したことがあるという方も居た。実施後に行った子どもたちへのヒアリング調査では、ほぼ全員がまた参加したいという返答だった。問題点としては「かえっこ」のルールがわからず、うまく参加できなかった子どもが居たことが挙げられる。スタッフによる子どもたちの誘導や、より丁寧な事前のルール説明等が必要であった。そのため、2006年度のかえっこでは、運営のお手伝いにまで子どもに参加してもらうことが出来なかった。

#### (3) 第3回実施内容

2007年度は、地域住民が企画・運営する「砲台ギャラリー」や「クルージング」などの他のプログラムと連携して「かえっこ」を行った。この日は海上で行う「船渡御」という西宮神社の神事の開催日でもあった。

#### [実施ワークショップ]

- a. 浜辺の探偵団 (運営スタッフ: 学生1名/地域住民1名)  
浜辺にある炭や花火のゴミなどを集めて分類する。
- b. 御前浜列車で探検ツアー (運営スタッフ: 学生1名/地域住民1名)  
地域の大人と共に浜の探検に行く。
- c. たこあげ (運営スタッフ: 学生1名/地域住民1名)
- d. かざぐるまづくり (運営スタッフ: 学生1名/地域住民3名)
- e. 石田屋 (運営スタッフ: 地域住民3名)  
地域住民による企画の紙芝居屋。
- f. 缶バッジづくり (運営スタッフ: 地域住民3名)  
地域住民企画によるオリジナルバッジの制作。
- g. 釣り大会 (運営スタッフ: 学生1名/地域住民1名)  
同時開催の企画をカエルポイントの対称として組み入れたもの。
- h. 砲台ギャラリー (運営スタッフ: 学生3名/地域住民4名)  
同時開催の企画をカエルポイントの対称として組み入れたもの。

#### [実施結果]

参加者は約250人と盛況で、この日は一日中浜に親子の姿が見られた。昨年度の参加者等が居たことで、前回よりもスムーズに子どもたちに受け入れられた(理解が早かった)。一人、核となる子どもが仕組みを理解すると、伝言ゲームのように子どもたちに浸透していく様子が見られた。「かえっこ」の運営自体を主催者として担ってもらうことはできなかったが、地域住民企画による自主運営のワークショップが増えた。これらのことから昨年度からの連続開催により、「かえっこ」がこの地域に浸透してきている様子が伺える。

さらに、運営に参加して頂いた地域住民の方々も、直に子どもたちの反応を見て、「来年も是非やっていきたい」「来年はもっと参加者を巻き込んで」などと、次の企画に期待する意見が多く聞かれた。



#### (4) 実験から明らかになったこと

今回、御前浜の周辺整備計画に関連した住民参加型活動に「かえっこ」を取り入れた結果、次のような効果を確認できた。

- ・好きなおもちゃと交換できる「カエルポイント」の収集は、子どもたちに対する参加の動機づけとして、たいへん有効である。
- ・家庭にある不要なおもちゃを提供してもらうことが、地域の大人と子どもとが協力して、簡単に活動に参加してもらう良い機会となった。
- ・「かえっこ」に含まれる遊び的要素が、日頃、地域活動に縁のない人々にも広く参加してもらえる要因となった。
- ・多くの子どもたちの参加が得られたことが、企画運営にあたる大人たちにも、活動に参加する上での高い充実感を与える効果をもたらした。
- ・「かえっこ」には、そのためのワークショップだけでなく、関連イベントを含めた多様な行事を組み入れることができる高い自由度がある。
- ・「かえっこ」のシステムが持つ柔軟性は、人々の創意工夫を触発し、人々の主体的な参加を促進する要因となっている。

また、以下のような事柄も明らかになった。

- ・当日持って来てもらうおもちゃだけでは、数が十分ではなく、実際には主催者側が、ある程度の数のおもちゃを予め確保しておく必要がある。
- ・地域の人々や子どもたちの主体的参加を得るためには、仕組みを良く理解してもらう必要があり、そのためには、複数回、継続的に開催する方が好ましい。

#### 4 まとめ

今回、御前浜において「かえっこ」を行った結果、普段浜に来ることのない、多くの人々の参加を得て、浜を対象とした地域活動に幅広く関心を寄せてもらうことができた。また、様々なワークショップを通して、子どもたちに浜での遊びを体験してもらい、人々に浜の価値を再認識してもらうことができた。今後も、「かえっこ」などのシステムをうまく利用しつつ、地域における人々の活動の連携を支援してゆきたい。